



古見 優衣 (ふるみ ゆい) 愛宕小 6 年生

作品名: 愛を感じる人と求める人

図 書: ハッピーバースデー

私は、日常生活において、様々なかたちで、多くの人からの「愛」を感じている。それが、そのときは嫌なことだと感じていても、後にそれが多くの「愛」であったと感ずることができる。

祖父母の家を家族で訪れた。自分のやりたいことや努力を積み重ねて仕事をしてきた祖父母は、私の尊敬の的である。そんな祖父母と将来の職業の話をした。私は、いままで医者になりたい、という夢を抱いていたが、祖父母の過去の経験からの話を耳にして、その他の新しい分野にも視野が広がり、多くのことに興味を持った。そしてなにより、年に数回しか会うことのない祖父母に自分のことを考えていてくれる、という事実とその想いが嬉しかった。

父母からは、よく注意を受ける。幼い頃、初対面の人や親戚の人、お世話になっている人と顔を合わせるときに、いつも恥ずかしくて、挨拶ができなかったり、挨拶をしたつもりでも、声が小さく、伝わらないことがあった。そのときは、注意を受けて反論があったり、嫌な気持ちになったりもした。しかし、今となっては、多くの人との関わり合いを持てているのは、挨拶によるものも大きいと考えられ、挨拶について指摘し、指導してくれたことが両親からの愛であったと、感謝している。

また、友人達と、日光移動教室のスローガンなどを決める際、意見を言い合って一つのものにできるということを感じることができ、学年全員が互いの存在を認め合っている素晴らしい瞬間だった。

その他にも、登校を見守ってくださる地域の方々や先生方など、多くの人々に出会って、愛を感じ、心にすき間を感じない満たされた生活を送る私だが、私の読んだ「ハッピーバースデー」という本の主人公、あすかは、心に傷を負った少女だった。仕事で忙しい父と母からは、あすかは何も気にかけてもらえず、誕生日も忘れられてしまった。優秀な兄とも悲痛な差別を受けていた。苦しいことがあると、喉をつまむくせがあり、声がでなくなってしまう。私は、そんな境遇に置かれたこ

となど無く、この本を読み、初めに衝撃が走った。そして母と兄からは、生まれてこなければ良かった、あすかは母から愛される良い子になりたい、と願ってしまう。しかし、祖父母の家で生活するようになると、あすかは、祖父母や自然からの愛を受け、声を取り戻すと、新しい転校先や家庭内でも自己を主張し、律するようになり、友人や家族と接することでお互いが変わっていき、愛を受け取って誕生日を祝ってもらうことができた。

私は、この本により、周囲からの愛は人を変え、その人を形成していく要素となる、ということを改めて感じた。世の中には様々な考えを持つ人が多くいる。それは、人それぞれの個性で、尊重すべきものだと思っている。しかし、その中で、路頭に迷っている人がいたら、周囲としてできる精一杯の愛を注いで手を差しのべていきたい。あすかの抱えていた心のしこりを取り除けるような愛として、積極的に話しかけたり、相手を気遣うことを、自分に愛を注いでくれている、全ての人に感謝しながら、今まで以上に心得て実践していきたい。